「話すこと」の指導と活動の充実に向けて：『Speaking Gym *Basic/Standard*』の発行にあたり

Ⅰ．「やり取り」に焦点を当てて　工藤　洋路
Ⅱ．「発表」に焦点を当てて　津久井　貴之

「話すこと」の技能が２つの領域へ

新学習指導要領において，小中高どの段階においても，「話すこと」が「やり取り」と「発表」の２領域へと分かれました．準備型のスピーチコンテストで金賞を取った生徒が，授賞式で審査委員から英語でインタビューを受けるとほとんど話せない，といったエピソードに見られるように，準備して発表する能力と，その場で即興的にインタラクションを取る能力は異なるものであると言えます．したがって，それぞれの能力は個々に伸ばしていく機会を生徒に提供していく必要があるでしょう．もちろん，「準備型の発表」と「即興型のやり取り」以外にも，「即興型の発表」や「準備型のやり取り」も想定できますので，多種多様なスピーキングの力を育成できるように教師が意識して指導していくことと，加えて，教材もそれをサポートできるようなものが望まれます．

Ⅰ．「やり取り」に焦点を当てて

１．「やり取り」の指導で留意すべきこと

ここでは「やり取り」に焦点を当てて，指導の留意点を述べていきます．まずは，中学校での定番のやり取りを見てみましょう．

Teacher: What's the date today?
Student 1: October 21st.
Teacher: Good. What day is it today?
Student 2: It's Monday.
Teacher: Right. How's the weather today?
Student 3: It's sunny.

このやり取りですが，まず，教師側は「答えを知っている質問」をしています．つまり，この質問は学習を促進するための質問と言えます．こうした質問は display question と呼ばれます．一方，実際のコミュニケーションでは，「答えを知らないから質問をする」ことが多いはずです．このタイプは referential question と呼ばれます．英語の力を伸ばすには，練習のためのやり取りと，実際のコミュニケーションを体験するためのやり取りの両方をうまく組み合わせて実践していくことが大切です．

上記のやり取りですが，もし毎回の授業で実践しているなら，生徒側から見れば「尋ねられることが予測できる質問」です．こうした質問はルーティーンとして行っているので，比較的答えやすい質問になります．一方，実際のコミュニケーションでは，予測できない質問を受けることも多くあります．英語の学習では，ルーティーンとしてのやり取りばかりを行うのではなく，予測できないやり取りも定期的に行っていく必要があります．

２．「話すこと［やり取り］」の活動例

「やり取り」の活動例は，上記の日付や天候を尋ねるようなルーティーンとしての活動以外にも多様なものが考えられます．基礎的な活動としては，教科書の対話文を，話者の気持ちを考えながら音読する活動も挙げられます．また，ディベートやディスカッションなどの高度な言語活動も「やり取り」の活動例になります．『Speaking Gym *Basic*』には，以下の例のとおり，いくつかの「やり取り」の活動が掲載されています．

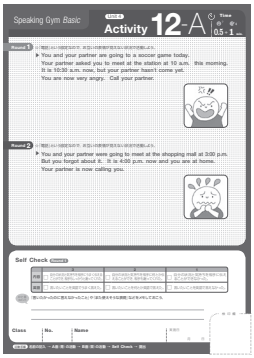
例１）インタビュー活動
あるトピック（例：What did you do during the last summer vacation?）について，ペアで，片方が質問をして，もう片方がそれに答える活動

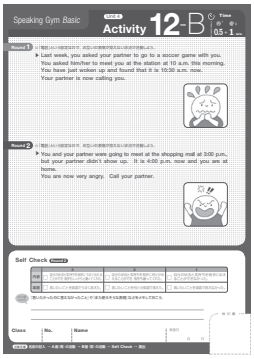
例２）ロールプレイ
与えられた役割（例：［生徒 A］部活のキャプテンをしていて，悩んでいることがある／［生徒 B］別の部活のキャプテンをしている）を踏まえて，目的（例：［生徒 A］助言を求める／［生徒 B］助言をする）を達成するために話す活動

次に，『Speaking Gym *Basic*』から，「やり取り」に関わるロールプレイのアクティビティーを1つ取り上げてみます(Activity 12)．これはペアで行う活動ですが，2人の役割や状況は以下のように設定されています(指示は英語で与えられています)．

生徒 A	生徒 B
・サッカーの試合を B と見に行く約束. ・10 時に駅で待ち合わせと B に言われた. ・10 時半になっても B が来ない. ・A は怒っている. ・B に電話をかける.	・サッカーの試合を A と見に行く約束. ・誘ったのは B. ・10 時に駅で待ち合わせの約束をした. ・起きたら 10 時半. ・A からの電話がかかってくる.

このように設定に多くの情報が入っているのは，話す内容を深くするためです．例えば，生徒 B には Last week, you asked your partner to go to a soccer game with you. という1文が入っていますが，自分が誘ったとなると，相手に謝る必要性がさらに増します．つまり，単に I'm sorry. だけでは終われない状況を作っています．多少設定が長くなっても，即興で英語を話す際に，何を話してよいかを考えるきっかけになる指示が出せれば，活動が活発化します．





3．まとめ(『Speaking Gym *Basic*』の執筆より)

『Speaking Gym *Basic*』には，上で紹介した「やり取り」以外にも，「発表」の活動も組み込まれています．いずれのタイプの活動も，コミュニケーションの場面を具体的に設定していることから，活動に取り組みながら，実際に英語を使っている感覚を生徒が得ることができます．実際に英語を使っている感覚が得られれば，英語学習への動機づけがさらに高まることが期待できます．

工藤 洋路(玉川大学 准教授)

Ⅱ．「発表」に焦点を当てて

1．「発表」の指導で留意すべきこと

まず，普段の授業で「発表」の言語活動を行う際に私自身が留意していることを挙げます．

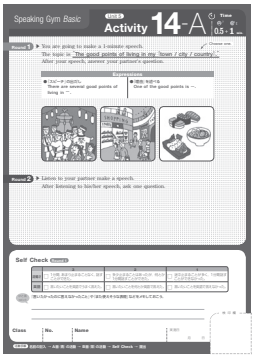
①「発表」「やり取り」ともに先生の話す英語が生徒にとっての言語モデルとなり，先生の話す姿が英語学習のロール・モデルとなる．

② スピーチでは，誰に対しての何のためのスピーチなのかを最初に確認し，導入と本論，結論などの構成を明確にし，それに必要な表現を指導する．

③ プレゼンテーションでは，様々なグラフの説明やその要点を伝える練習を行ったり，聞いた生徒がその要点を再度相手に伝えたり(retelling)するなど，段階的に言語活動を行う．

2．「話すこと［発表］」の活動例

ここでは，『Speaking Gym *Basic*』(Activity 14)を例に「話すこと［発表］」の指導や活動のポイントを具体的に示していきます．



ここでは，生徒 A が自分の住んでいる街や国のよさについて，生徒 B が男子校・女子校，または共学校のよさについてスピーチを行います．30 秒の準備で約1分の発話が求められますので，端的に自分の考えとその理由を伝える必要があります．スピーチとしてのまとまりが出るよう，スピーチの出だしが提示されていますので，前者の「住む街のよさ」についてであれば，There are several good points of living in my city. One of the good points is ... の後に続いて生徒が自分の考えを述べられるように表現の支援があります．さらに，その後に理由を付け加えることで，少なくとも3文以上は話せるようになります．また，話し手には "After your speech,

answer your partner's question." と，聞き手には "After listening to his / her speech, ask one question." と指示があります．「発表」（スピーチ）であっても双方向のやり取りを意識して活動を行わせる工夫がされています．生徒は，ついつい「英語で発表すること」だけに意識が向きがちです．教師の一言やこうした指示・支援によってコミュニケーションとしての「発表」を成立させます．

『Speaking Gym』では，「*Basic*／*Standard*」，「発表／やり取り」の別を問わず，振り返りとして自己評価と，言えなかった表現を復習させるメモ（ひと言コメント）が付いています．「主体的に学びに向かう態度」の育成やスピーキングからライティングに繋げて復習させる支援の流れも，こうした活動を「力の付く活動」として定着させるための大事なポイントです．

３．まとめ（『Speaking Gym *Standard*』の執筆より）

『Speaking Gym』には，日頃高校現場で試行錯誤し，生徒たちと言語活動を積み重ねる中で生まれたアイデアやこだわりがあります．*Basic* に続いて発刊予定の *Standard* よりそのうちの３つを紹介します．

①「思考力・判断力・表現力」育成のための工夫
② 表現する，発想を比べる楽しさを味わえる仕掛け
③ ストラテジートレーニング

①について，私は，先生の１つの発問や言語活動のちょっとした工夫で，そうした力の素地を作ることはできると考えます．例えば，What sport do you like the best? ではなく，What sport do you think is the best for your new classmate to play in your class together? などとすれば，生徒の頭がより働くようになるはずです．もちろん，教師がわかりやすい英語で生徒に提示する力，例示やモデルを教師自ら示す力，生徒の英語の反応を recast して正しく言い直させる力も欠かせません．さらに，言語活動をとおして，表現に必要な語法や文法の知識・理解，相手の言ったことを理解できる基本的なリスニング力の大切さを生徒たちが実感することになります．

②は，生徒にとって身近な話題や，逆に少しクリエイティブな要素を入れた活動や仕掛けを考えるということです．一例を紹介すれば，"You are invited to a birthday party of your classmate next Sunday. But you have the first date that day with your boyfriend / girlfriend. You cannot decide which one you should go to. Ask your partner for advice."（Activity 8）という活動があります．皆さんの生徒さんならどのようなアドバイスをするでしょうか．きっと高校生なりの発想や考えがあるはずです．また，別の例では，４コマイラストを描写する活動（Activity 6）があります．しかし，この単元の最後の活動では，１コマの写真しか用意されていません．この１枚の写真から生徒が自由に発想を膨らませ，１コマ目または４コマ目にその写真を持ってくる形でストーリーを作って話します．クラスメイトの話す英語に耳を傾け，その発想を楽しみながら，話の構成や英語の表現の学習としても，ここはこうしたら話が繋がる，こんな時はこの文法や表現を使える，といった学び合いが起きることを想定しています．

③に関して，生徒たちに英語を話すことに慣れてもらおうとやみくもに言語活動を続けても，慣れるどころか苦手意識や不安だけが募ってしまいます．どのように英語のやり取りを継続させたらよいか，膨らませたらよいか，などのストラテジーの指導と練習が必要です．"I like soccer." "Oh, soccer! I like tennis." という小学校で見られるやり取りには，「繰り返し」によって驚きを表現する，という初歩的なストラテジーの使用が見られます．中学，特に高校では系統的にストラテジーを指導し，改めてそこで用いられる文法や表現についてまとめ直すと，言語の形式や意味，働きについて改めて学習する機会になります．新課程では，中学校の新出言語材料になる仮定法も，高校では，"If I were you, I would ask my best friend about that problem." と，ちょっと答えづらい質問だが，私にそれを聞くのであれば…と答え始める際に用いたり，回答することを丁寧に断ったりする際のストラテジーとしてとらえ直すことも求めたいところです．

授業において中心となる学習活動は「言語活動」です．言語活動は，教師による教科書の解説を聞き終えた後のご褒美ではありません．もちろん，「話すこと」以外の技能の言語活動も充実させなければなりませんが，言語活動こそ授業における英語学習の中核となるよう，私たち現場の教員は試行錯誤を繰り返しながら生徒たちにとってよりよい学びの機会を提供していきたいものです．

津久井 貴之（お茶の水女子大学附属高等学校 教諭）